

【樹木の部屋】

ナンキンハゼ（トウダイグサ科ナンキンハゼ属 *Triadica sebifera*）

和名；ナンキンハゼ（南京黄櫨） **別名**；トウハゼ（唐黄櫨）、ウキュウ（烏臼木）

英名；Chinese tallow tree

キントラノオ目 落葉広葉高木 **原産地**；中国

花言葉；真心、心が通じる **花の色**；黄



← 写真－1 ナンキンハゼの樹形

撮影日：2023 年 6 月 29 日

撮影場所：天理市市街にて

撮影者：M さん



→ 写真－2 ナンキンハゼの小枝と葉

撮影日：2023 年 6 月 29 日

撮影場所：天理市市街にて

撮影者：M さん



← 写真－3 ナンキンハゼの花
 撮影日：2023 年 6 月 29 日
 撮影場所：天理市市街にて
 撮影者：M さん

→ 写真－4 ナンキンハゼの樹肌
 撮影日：2023 年 6 月 29 日
 撮影場所：天理市市街にて
 撮影者：M さん



↑ ↓ ↘ 写真－5、6、7 ナンキンハゼの種子
 撮影日：2023 年 12 月 28 日
 撮影場所：天理市市街にて
 撮影者：M さん



ハゼノキ(ウルシ科)と同じように「蠟が採取できる中国の木」という意味合いでナンキンハゼと命名されたという説が有力だそうですが、紅葉が埴輪の色に似ているため、埴輪を作る埴師(はにし)にちなんで命名されたという説もあるそうです。

黄色の花や美しい紅葉、真っ白な実を鑑賞でき、放任しても成長する丈夫な植物のため、街路樹、公園樹などに幅広く植えられています。紅葉が始まるころに黒い実がはじけて白い実になり、しばらく枝に残ります。白い実だけの状態の枝ものとして流通もしており、ドライフラワーとして利用されています。

日本ではハゼノキから蠟を採取していたそうですが、中国では気候の関係から生育できず、本種を利用していたそうです。たいていの樹木は美しく紅葉するために寒さが必要ですが、ナンキンハゼは暖地でもカラフルに紅葉するため、特に関西以西では珍重されているそうです。一方、原生的な林が残る地域ではシカが好まない外来種の樹種として問題になっており、春日山原始林では成木が発見された場合には伐採されているそうです。

樹皮は灰褐色で、不規則に縦に裂け、荒れた肌合いを見せます。若木の樹皮は、裂け目の間に淡橙色の肌が見えます。一年枝は細く、淡緑褐色無毛で、枝や葉を傷つけると白い乳液がでます。

葉は、丸みを帯びた菱形卵形で、先端は尾状に尖り、基部は広いくさび形または切形です。縁は全縁。ポプラに似た形で、互生します。秋には紅葉し、赤色や黄色、紫色などが混じります。

開花時期は6～7月で、雌雄同株です。枝先に黄緑色をした小花が、長さ6～18cmの総状花序をだし、花序の上部に多数の雄花、下部に1～3個の雌花をつけますが、雌花がつかないこともあるそうです。

果実は秋に、3稜のある扁球形の蒴果(さくか)を黒熟させ、寒くなるにつれて殻が割れ、3個の種子を出します。種皮は黒色ですが、その表面は脂肪に富んだ白色の蠟状物質で覆われています。蒴果が裂開しても、種子は果皮から自然に離脱することではなく、紅葉期から落葉後まで長く樹上の枝先に残り、白い種子が非常によく目立ちます。

ナンキンハゼの種子の汁液にはジテルペン酸エステルなどの有毒成分が含まれ、触れれば皮膚がかぶれ、誤飲すれば嘔吐、下痢、腹痛を引き起こしますが、カラスやスズメなど多くの鳥がこれを採食し、蠟状物質を消化吸收して種子を排泄することで、種子分散が起こります。

有毒な樹木ですが、種子の脂肪を石鹼や蠟燭の原料、根皮や果実を薬用や家具材や器具材にもされるそうです。増殖は実生によります。生長が早いため、植栽スペースは広い空間が必要です。そのため一般家庭の庭には不向きです。剪定には強い樹木ですが、一律に刈り込むと季節に応じた観賞価値がなくなるので、不要な枝を適宜元から抜くような剪定が望ましいそうです。

<ちょっと一言>

*長崎県長崎市、京都府京田辺市の市の木になっています。